

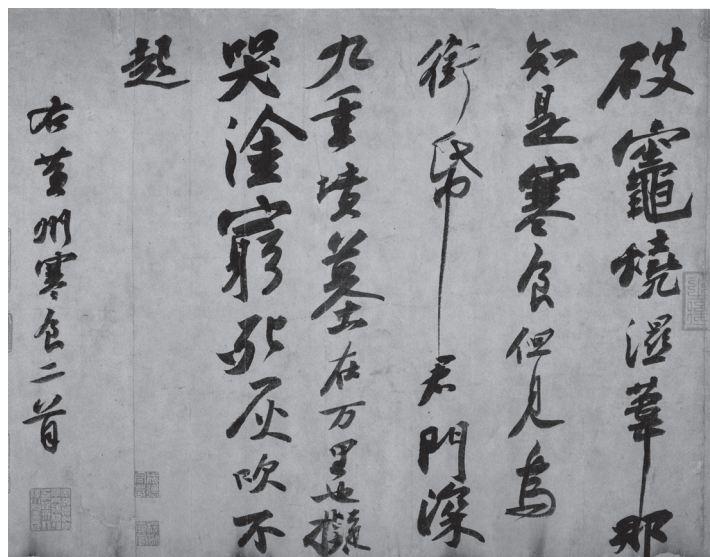
宋・蘇東坡（蘇東坡）
（黄州寒食詩卷）

「人生で最も楽しい瞬間は、文章を書いている際に、筆が複雑な自分の思想を、すっかり表現できるときである。『この世には、これにまさる大きな楽しみはない』と、私はひそかに思っている」蘇東坡はあるとき友人にこのように語った。

蘇東坡の長編評伝、林語堂著『蘇東坡』（合山究訳、講談社学術文庫）第一章「文忠公」からの引用である。林語堂の注記によれば、これは『春渚紀聞』卷六「文章快意」に見られる一節であるという。

蘇東坡は人生で最も楽しい瞬間を繰り返し味わったがために、人一倍の艱難をなめた。元豊三年（一〇八〇）二月に詠んだ七言律詩「初めて黄州に到る」は「自ら笑う平生口の為に忙なるを」の一句ではじまる。「自分の生涯が口のことですべてこ舞いしているのは我ながらあきれるほどおかしい」という意味であるが、事実、彼は詩や文の「口」によるわざわいにより、左遷、投獄、流謫の憂き目に遭った。

実はこの詩の第三句と第四句は、もう一つの「口」、すなわち無類の食いしん坊ぶりを自ら語るものになっている。「長江郭を遶つて魚の美なるを知り、好竹山に連なつて筍の香なるを覚ゆ。」（「口で失敗して流されて来たこの黄州では、）城郭をとりまく長江を見ると、魚がうまそうだし、山々



に連なるすばらしい竹林からは筍の香ばしさが感じとられる。」

そしてまた、同じく黄州時代に詠んだ「猪肉頌」^{ちよにくしよう}と題する詩の一節にも次のようにある。「黄州の好猪肉^{ぶたにく}、價^ね(価)錢^{だん}は賤^{やす}きこと土の如し。貴者は肯^{あえ}て喫^{たべ}ず、貧者は煮ることを解せず。」(「黄州にはいい豚肉があり、値段はただのように安い。しかし金持ちが食べたがらないし、庶民も煮る方法を知らない。」)この詩句は今でも私たちが口にする有名料理「東坡肉^{トンポーロウ}」のことを連想させる。

ここに最後の部分を取り上げた蘇東坡の代表的な書作品(黄州寒食詩卷)(台北・国立故宫博物院蔵)の詩情は、以上のような詩句の対極にあるといえる。「我れ黄州

に來たりし自り、已に三たびの寒食を過ごせり。年々春を惜しまんと欲すれども、春去つて惜しむを容れず。」にはじまる二首の詩。おいしいものを食べることで心の逃げ場を求めた楽天家の彼ではなく、政争にやぶれた流罪人として、自己の人生を見つめた静かな思索の様が伝わってくる。そして、この書の肉感に満ちた筆触と、心の動きをそのまま映し出しているかのような伸縮自在な運筆の展開は、これを鑑賞する者に「書は人なり」という古くからの言葉が決して死語ではないことを印象づける。

この二首の詩は、元豊五年（一〇八二）三月に作られている。問題とされるのは、いつこれを書いたかであるが、このことについては詳しく考察する手立てがない。少なくとも詩の初稿の草稿でないことは確かである。何年か後に、この二首の詩を書く必要が生じ（おそらく人に贈るために）揮毫したのではないか。それは作詩後間もなくのことであつたかもしれないが、自分自身のために高価な料紙を使い、このような形で詩を揮毫することはなかつたはずである。

この作品は、別々の紙に書いた後で、つなぎ合わされたもので、第二首の途中（全体では十行目と十一行目の間）の奇妙な断裂がそのことを示している。そして、意味深長な詩意とどのようにに關係しているのかは明らかでないが、書としても特有の表情が盛り込まれている。（李太白仙詩卷）（大阪市立美術館蔵）にも見られることだが、書いているうちに、いつの間にか筆の動きが渦を巻くように大きくなり、側筆のままに豪快に文字を畳みかけている。これは決して意識的な工夫という

ものではなさそうである。

実際に筆を執って臨書してみると、筆管をかなり倒しながら運ぶ、きわめて特殊な筆づかいで書かれていることがわかる。文字の構えも右肩上がりが基調になっていて、毛先のよくきく硬めの筆をどつしりと運んでいる。また、どの部分で墨を含ませているのかがわからないほどに墨量が均一に見える。これは表面に加工が施されている料紙の性質とも大いに関係していよう。重量感に満ちた、油で書いたような筆触はこの人物ならではのものである。

後ろにある黄山谷の跋文には、「試みに東坡をして復た之を為さしむるも、未だ必ずしも此れに及ばざらん。」とある。蘇東坡自身もこの作の書法には自分らしさが出ているとして満足したのではないか。いつの一筆かは不明ながら、この二首を揮毫した瞬間もまた、詩をつくったばかりの感情とは別ものとして、彼にとっては「人生で最も楽しい瞬間」であったにちがいない。